

ほんとは好きだぞお母さん

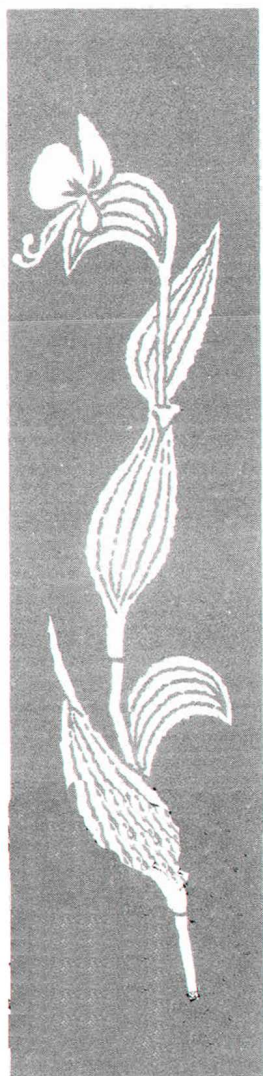
亀村五郎



ほんとは好きだぞお母さん

亀村五郎

あすなろ書房



ほんとは好きだぞ

お母さん



著者紹介

亀村五郎 (かめむら・ごろう)

1927年、千葉県佐原市に生まれる。
東京第一師範学校卒業、国学院大学
文学部国文学科卒業。

現在、成蹊小学校教諭、日本作文の
会会員。

著書『考える体育』『学級の体育』

『日記指導』『読書指導』

現住所一東京都国分寺市並木町

1-7-27

著者 亀村五郎

発行者 山浦常克

発行所 株式会社 あすなろ書房

東京都新宿区弁天町107 石嶋ビル

電話(203)3350 ■ 振替東京9-63084

0337-50101-0060

落丁・乱丁本はおとりかえ致します

序にかえて

“今の子どもにも夢はある”

一年生の子どもたちに、

「みんなは、大きくなったら、何になりたいかなあ。」

と、書いてもらったから、子どもたちは、次のようなことを書きました。

ぼくは、おおがたとらっくのうんでんしゅになって、にもつを、たくさんつんではしるんだ。

わたしは、おはなやさんになりたい。わたしは、おはなやさんになったら、たくさんおはなばたけをつくりたい。

ぼくは、しろばいのうんでんしゅになって、じけんを、どんどんかいけつしたい。

わたしは、じゅういになりたい。そして、いろいろのどうぶつをみたい。そして、「ぎっしゅ」が、こどもをうんだら、すてる人がおおいから、こどもをうまないようにしたい。

ぼくは、いしゃになって、みんなのおなかの中をみてみたい。いちばんみたいのは、とがわくのおなかをみたい。それから、せんせいのおなかをみたい。

このほか、せんせいになりたい。ジェットキのパイロットになりたい。ガードマンになりたい。など、いろいろありますが、こんな子どもたちを見ていますと、ほんとに、ひとりびとりが、それぞれの個性に応じて、夢をもっていることが、よくわかります。けれども、よく、おとなの人たちは、「今の子どもは、夢がない。」というようなことをいいます。はたして、今の子どもたちには、夢がないのでしょうか。

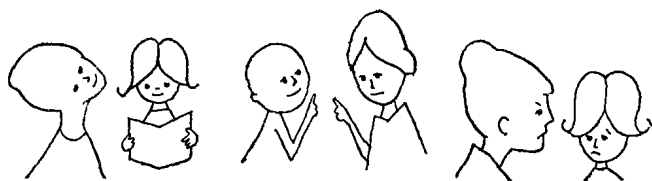
わたしは、もう三十年ほど、小学校の先生をしています。今の小学生を見ていて、夢がないというように思えません。いや、もう少し、ていねいにいうなら、夢をもつ素質がなくはない、といいたいです。わたしは思います。ひょっとしたら、子どもに夢がないのではなくて、まわりのおとなたちに夢がないのではないかと思うのです。

おとなは、子どもに期待します。子どもたちが、賢くなってほしい。人間らしいすばらしい人間になってほしいと願っています。けれども、どうしたらそうなるのかという、具体的な方法になると、案外とまどってしまい、めまぐるしい世の中の動きに、ついついつられてしまうことがあります。わたしは、小学校の子どもと、そのおかあさんたちとのつきあいの中で、すてきな育ち方をしている子どもを、たくさん見てきました。そして、そのおかあさんたちの育て方も、見せてもらいました。わたしは、このめまぐるしさの中で、ほんとに人間らしい人間を育てようとしているおかあさんたちから、ずいぶんたくさんのことを学んできたのです。

子どもは、どんな子どもでも、ダメだという子どもはいないはずで、どの子どもも、夢をもてますし、人間らしく成長できるはずで、そして、それはまわりのおとなたちが、子どもの素質をつぶさず、伸ばしてやることによって可能になることです。

わたしは、おかあさんたちから学んだことを、ここに書いてみました。それは、わたしの仕事以外のことのようにありますが、学校教育だけで子どもは育たないということを思えば、あながちむだなことではないと思っただけからです。

一九七五年十月



もくじ

序にかえて

“今の子どもにも夢はある”……………1

ほあんかんごっこ

“ユーモアのあるおかあさん”……………6

ぞうきんぬいは、いいもんだ

“子どもに仕事を手伝わせよう”……………20

からすうりの歌

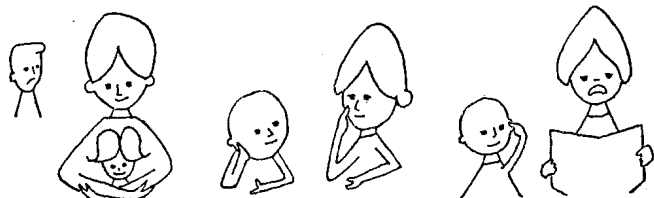
“自然を大事にするおかあさん”……………35

行事と子ども

“お祭りを見せたり、参加させたりしよう”……………52

くさいおはなし

“はずかしさを知るおかあさん”……………66



友だちの中で伸びる

“子ども同士のつきあいを知らう”……………80

子どもに本を読ませたい

“おかあさんはどうするか”……………97

一步のこらえが、子どもを伸ばす

“先取りをしないようにしよう”……………115

ぼくは、カラーテレビをかいました

“物を大切にさせよう”……………132

劣等のテスト

“おかあさんは、自信をもって”……………145

おかあさんはしかかっていい

“まともなしかり方をしよう”……………160

子どもには、それぞれちがった接し方を

“八人の子を育てたわたしの母”……………172

あとがきにかえて……………187

ほあんかんごっこ

“ユーモアのあるおかあさん”

外国人にくらべて、日本人は、ユーモアにとぼしいといわれています。わたしは、ユーモアについて、むずかしい研究をしたこともありませんが、また、外国人のユーモアについても、あまりわかっているとはいえません。しかし、外国の映画や、外国人の登場するテレビ（とくに欧米の人たち）などを見たり、小説などを読んだりしますと、日本人とちがうものを感じます。その会話のやりとりの中に、いわゆる機知に富んだものが見られるのです。それが平穏なときには、さわやかな笑いを作り、また、ひじょうに危険がせまっているときなどでも、緊張をやわらげたり、落ち着きをとりもどしたりする役目をもっているように思います。

日本人は、欧米の人たちよりも、きまじめなたちなのでしょうか、それとも、会話を豊かにするすべを持つことを否定してきたという歴史があるのでしょうか。長い間の武士による政治

のなせるわざかもしれません。わたしの知るかぎりでは、武士の世界にはこのようなものを歓迎したことはないようですから。

わたしはここでユーモア論を展開するつもりはありません。でも、もっと日本人に、ユーモアがあつていいのではないかと思つて一人です。ユーモアのある生活というのが、長い歴史のうへの所産であるとするならば、一朝一夕に、作れるものではないでしょう。しかし、中には、こんなおかあさんもいるのです。

ほあんかんごっこ (二年・男)

ぼくは ほあんかんごっこをしました。

けれど、

だれも おどしてやれないので、

おかつてに いきました。

おかあさんが、

ごほんの したくを やっているので、

「手をあげろ。」

と いったら、

おかあさんは、

手を つかっていたので

足を あげました。

おそらく夕方のことでしょう。子どもは、だれも相手がいないために、おかあさんを相手にえらんだのです。けれども、おかあさんは、夕食の支度で、両手を使えなかったのです。ふつうのおかあさんだったら、

「この忙しいときに、何するの、あっちにいつてらっしゃい。」
というところではないでしょうか。けれども

「手をあげろ。」

といわれたとき、このおかあさんは、足をあげたのです。びっくりしたのは、子どもの方でしょう。そして、そのびっくりが、やがてあたたかいぬくもりとなって、子どもの心の中に広がっていったと思います。だからこそ、こうした詩の形で、心の動きを表現したのだと思います。ゆったりして、楽しい気分の人に、人を和ませることばをいうことは、できないことでは

ありません。しかし、いそがしい仕事の最中や、ピンチにたたされているときに、その人間性から、とび出すのが真のユーモアといえるのではないでしょうか。こうしたことは、つけやきばではできません。小さい子どもころからこういうおとなたちに囲まれて、しだいに自分のものになっていくのだと思います。そうだとすれば、この、ほあんかんのおかあさんは、すてきなおかあさんではないでしょうか。足をあげたおかあさんのようすを思い浮かべると、読んでいる方の顔まで、ほころんできます。

豊かな心を育てるユーモア

次のおかあさんは、どうでしょう。

おかあちゃん (六年・男)

おかあちゃんが

クワをかついで

畑から帰ってきた。

ぼくは、

もっていたパンを

半分にして、

「食えよう。」とだした。

おかあちゃんは、

びっくりしている。

ほくは、

マイクをもったまねをして

「ごかんそうを」と

口に近づけた。

「はい、かんしゃかんげき。」と、

顔いっぱいしわにしてわらった。

畑から疲れた足をひきずって帰って来るおかあさんを見た男の子が、おそらくおやつであるパンを、おかあさんに食べさせたいと思ったのでしよう。パンを半分にして、多少テレかげんに「食えよう。」とっています。おかあさんがびっくりしたので子どもは、とっさに、マイ

クを持ったまねをして、「ごかんそうを。」といったのです。

ところが、このおかあさんは、びっくりしたものの、すぐ「はい、かんしゃかんげき。」と受け答えをしています。わたしは、りっぱなおかあさんだと思ったのです。

「何ですよ、この子ったら。」などということばが、出がちなのに、パッと子どもの機知に答えているのです。一見、この場合は、子どもの方がユーモラスに見えます。けれども、よく読んでみると、やっぱり、この母親にして、この子どもが生まれたと思えてならないのです。

その底にあるのは何でしょうか。それは、相手の立場を考え、相手をいたわる心であると思います。疲れて帰ってきた母親を思う子どもと、いじらしい考えをもつ子どもに答えようとす
る母親のやさしい心根とは思えないでしょうか。

こんどは、めっぼう楽しい文をお目にかけることにしましょう。

とてもふざける　うちの　おかあさん　（一年・女）

きょう、学校へいくまえに、おかあさんが、

「きよこ、きょう、学校できゅうしょくに、おしるがでるから、おかあさんのぶん　おな

かにいれてきてちょうだい。おかあさん、おしるこ大すきだから。」
と、いいました。

きよこは、うちのおかあさんは、どうしてこんなにふざけるんだらうとおもいました。
うちのおかあさんは、もっとふざけます。

まえに、よる、おとうさんが、かえってきたとき、おねえちゃんが、

「あ、おとうさんがきた。」

と、いって、ねたふりをしました。でも、おとうさんがへやにはいつてくると、おねえちゃん
の目がぱちぱちうごくので、おとうさんには、すぐに、ねむったふりをして、おきてるな
と、わかってしまいます。

すると、おとうさんは、かってこないのにかってきたように、

「おかあさん、アイスクリームをかってきたのに、あつこ、ねててたべれなくて ざんねん
だね。」

と、うそをいいます。

そうすると、おねえちゃんは、はじめはがまんをしているけれど、がまんできなくなつて、
おきてきます。

それが、どうして おかあさんのふざけるのに、かんけいがあるかというと、さっきの

「アイスクリームをかってきたのに。」

という、おとうさんのことばにつづけて、

「たべよう、たべよう、おねえちゃんにあげないで、たべよう。」

と、おかあさんがいうからです。

うちにかえってから、ふざけて、おかあさんに、

「おかあさん、おなかに、おしろいこいれてきてあげたよ。」

と、いいました。学校で、なおみちゃんに、そのことをはなしたら、

「きよちゃんも ふざけていえばいいでしょう。」

と、いったからでした。

おかあさんは、またふざけて、

「たべさして。」

と、いって、きよこのおなかをだして、おかあさんの大きい手で、かじりました。

大きなはだったから、いたかったです。

子どもを学校に送り出すとき、おかあさんたちは、どんなことばをいって送り出すのでしょうか。わたしは、このことについて、おもしろい調べをしたことがあります。低学年の子どもたちに、

「けさ、学校へ来るときおかあさんたちは、みんなに何かいいましたか。」
という質問をしたのです。すると、大半の子どもたちは、

「何もいわなかったよ。」とか、「何もいいません。」

と、答えたのです。しははらくたつて、母の会合のときに、こんどは、おかあさんたちに、
「みなさんは、子どもを学校に送り出すとき、毎日、何かいいますか。」

と質問してみました。すると、驚くことに大半のおかあさんたちが、毎日、必ずいつているというのです。わたしは、さもあろう、と思いました。子どもを学校に出すとき、だまって出ようなおかあさんたちは、まず、いないと思います。けれども、これらのことばは、たいてい「ふみきりに気をつけるのですよ。交差点はよく見て渡るのですよ。」

「先生のいうことをよく聞いて、勉強するんですよ。けんかしちゃだめよ。」
とか、

「わすれものはないの、〇〇は持ったの。」